

理学 GCP UPLB コース受講者の声

Batch19 (2025年度)

「そうだ、フィリピンへ行こう！」

数学科1年 K.N.

私が UPLB 英語研修プログラムに参加した理由は、日本の外を見たかったからです。私は物心ついた時からずっと日本にいました。日本の生活は快適で大きな不満もなく平和なので、ニュースや新聞、SNS で海外のことを目にすることはあっても、どこか別世界で起きていることのように感じ、他人事だと思っていました。そんな自分がなぜ海外を見たいと思うようになったかという、新しい刺激を得たからです。私は日本に住むのに素晴らしい国だと思っていましたし、今もそう思います。しかし、ずっと日本にいるのは損だと思います。なぜなら、ずっと日本にいれば、日本での刺激に慣れてしまい、つまらなくなるからです。この状況を打破するためには海外へ行くのが最も良い選択肢の一つだと思います。海外へ行くことによって、海外が斬新で興味深く面白いのはもちろん、日本に帰ってからも日本をまた違った視点から見ることができると、日本での暮らしがさらに充実したものになります。フィリピンは英語が公用語で、比較的日本人から近く、宗教も違うため異文化に触れたい、視点を増やしたいと思うならばとても良い国です。このように、とりあえず海外へ行きたいという欲求を満たしてくれるこのプログラムですが、よい点は海外に行けるだけにとどまりません。

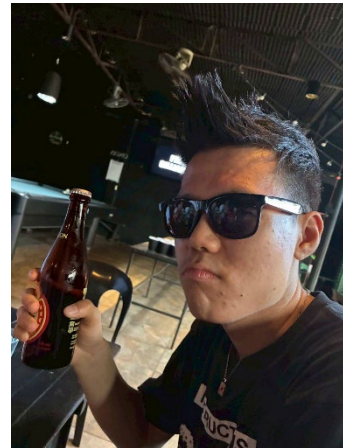
留学や海外滞在でありがちなものとして、日本人グループで行き、日本人同士で日本語を使って仲良くやり、結局言語が身につかないというものがあります。これを選べるためには、通常、海外の人に話しかけ仲良くなるという、はじめて挑戦するにはなかなか難しいことが要求されます。このプログラムでは、最大三十人という日本人大学生集団で行くため、前述のようなことが起こりそうと思われるかもしれませんが、その心配はありません。なぜなら、3 週間のうち、平日は英語の授業を受けた後、現地 UPLB の選ばれし大学生さんたち (Student Facilitator, SF) とフィリピンの街をめぐり、GI (Guided Interaction) とよばれる時間が2時間あります。GI の時間では神戸大学の先生が決めたグループ (神戸大学生3~4人、ファシリテーターさん2人) で現地の様々なカフェ (スタバからボードゲームができる場所まで) やスーパーマーケット、現地のカラオケなど本当に様々なところへ行き、様々なことを体験することができます。GI の時間中はファシリテーターさんと英語で会話をするので英語での日常会話力が身につきます。また、フィリピンは日本に比べて衛生環境がそこまでよくないのでお店を選ばないと体調を崩しやすくてですが、どのお店がよいかを熟知しているファシリテーターさんが同伴してくれるためその心配もありません。私は、はじめのうちは、ファシリテーターさんの英語を聞き取るのに苦労し、どう話せばよいかわかりませんでした。徐々に慣れていき最終的には問題なく会話できるようになりました。また、3 週間をという長い期間をともにしたため、ファシリテーターさんととても仲良くなることができ外国人の友達が自然とできました。

現地の大学生と過ごす機会はこれだけではありません。夜の時間にナイトセッションという数人ではありますが面接で選ばれたベテランの英語を教えてくださいと授業の課題や復習をする時間があります。参加は自由なので街で遊びたかったら遊びにも行けますし、部屋で休むこともできます。私はここで子音の R と L の発音を極めました。フィリピンに行く前と比べて明確に変わった点の一つは R と L の発音だと思います。

このプログラムのいいところは英語だけではなく、突然ですが、あなたは今まで家族以外の人と同じ部屋で3週間以上過ごしたことはありますか？私はありませんでした。私はプログラム参加前までは人と距離を保つようにしていましたが、3 週間も同じ部屋にいるというのは想像以上に距離が近くなり、必然的に仲良くなりましたし、自分にしては珍しく、腹を割って話したと思います。同じ部屋の人だけでなく、ほかの部屋の人ともたくさん話す機会があるので、私のように距離を保って生きてきた人は、ほかの人のかなり深い部分まで知り、人間として成長できるとも良い機会だと思います。第一印象では全然違うタイプだと思っていた人が、実は深くでは共通点が意外に多かったです。なぜ普段積極的に人とはかかわるようなタイプではない私がなぜ一歩を踏み出すことができたかというと、フィリピンという日本ではない場所で、頼ることのできる日本人という共通のつながり、仲間意識が自然に距離を縮めたからかもしれません。プログラムに参加する多くの人をほとんど知らない状態で、どうにか安心できる環境を手に入れようとしたのかもしれません。しかし、周りに日本人が少ないからこそ、日本人特有の同調圧力を感じにくく、挑戦しやすい環境であったのは間違いありません。自分らしさを出しやすい環境でもあったと思います。

もし迷っているくらいなら行ったほうが絶対いいです！！本当におすすぬめ！！本気で挑めばマジで人生変わります！！英語力をつけに行つたつもりが、英語力も付いたけど人間力もつけられ、人生観を変えられてしまいました。本当に刺激的な3週間日本に帰ってきてても余韻が大きいです。フィリ

ピンでの 3 週間は本当に充実していてここに書ききることは到底できないし、言語化できないこともたくさんあったので実際に行って体験してみたいです！



Batch19 (2025年度)

「人生で最も濃い3週間」

惑星学科1年 Y.S.

私は、元々英語で留学生と交流することが好きで、もっと英語力を上げるために留学をしたいと考えていました。しかし、1 年間のような長期留学は不安が大きいため、3 週間のこの留学プログラムに参加しました。このプログラムでは留学前に数回の事前学習会があります。グループごとにフィリピンについて調べプレゼン発表をしたり、タガログ語を学んだり、プログラムについて詳しく知れる機会もあり、しっかりと準備して留学に臨みました。また、事前学習を通して他のメンバーとも知り合えたので3 週間生活を共にすることの不安は少なかったです。

現地での生活は、日本と大きく異なることが多く最初の方は戸惑うことが多かったです。例えば、水道水が飲めず、歯磨きをするにもウォーターサーバーの水を使う必要がありました。トイレでも、トイレトペーパーが流せなかったり、日本のように手をかざすだけで洗面台の水が出たりしないので、手をかざして数秒経ってから『あ、これ手動か』と気付かされました。ストリートフードではお腹を壊す可能性があることや、野良犬に注意をする必要があるなど、安全面でも日本と大きな違いを感じました。これらのことは、事前学習会で知ってはいたのですが、実際に体験してみた時の衝撃は大きかったです。他にも、食事の味付けが日本と大きく異なり、スイーツは砂糖が多く使われとても甘かったです。酸味の効いたスープは苦手な生徒が多かった印象があります。

交通面でも、日本との違いは顕著でした。圧倒的に交通量多く、2、3 人乗りしているバイクも多かったです。移動中の Van では、車線変更の回数の多さや道の凸凹の多さを体感しました。また、信号のない所では、自分でタイミングを見計らい手を出して車を止めながら渡る必要があり、日本では考えられない経験でした。現地では、日本で言うタクシの代わりにジップニーという乗り物が主流であり独特のエンジン音や、運賃の渡し方、降りるときに好きなタイミングで「パラボー」というルールなどとても印象的な乗り物でした。

batch19 英語の授業では、生徒が主体的に参加するスタイルが特徴的でした。特に、発言を求められる機会が多く、自分の意見を英語で表現する練習になりました。授業の最初には、ペアやチーム対抗のゲームやダンスを取り入れて楽しみながら始まるのが多かったのも印象的でした。ほぼ毎回の授業の終わりには、指定されたシチュエーションでのロールプレイングの台本を考え、グループごとに発表する機会がありました。これらの経験を通して、人前で英語を話すことへの抵抗が少なくなり、ミスを恐れずに発言できるようになるなど、自分の中で大きな変化を感じました。さらに、発音の授業では、r と l の違いについて詳しく学びました。実際に一人ずつ先生に発音を聞いてもらう機会もありましたが、正確に発音したり、違いを聞き分けることが大変難しく、改めて自分の課題を実感しました。

ナイトセッションでは授業の振り返りや予習をメインで行い、SG にたくさん質問をして、さらに詳しく学んだり、授業内容を定着させることができました。発音する際に下の位置がどこにくるかなどを詳しく教えてもらった

Batch20(2025年度)
「控えめに言って神でした」
数学科1年 S.I.

のが大変有益でした。あまりやることがない時は、英語でその日の出来事を日記に書きSGの人に添削してもらったこともありました。どんな質問をしても親身になって答えてもらってとても助かりました、彼らがいなければ私は3週間でここまで成長することはできなかったと思います。

GIの時間を通して私は1番フィリピンについて知れたと思います。ファシリテーターの方々、初対面でも非常にフレンドリーでとても馴染みやすく明るい印象でした。みんなでゲームをした時も、カラオケ大会の時もファシリテーターの方々1番を出してノリノリで楽しんでいてそのおかげでとてもいい思い出が増えました。GIの時間も2時間という短い時間の中でメンバー全員が楽しめるように行き先を考えてくれて、ロスバニョスの街を満喫できました。ファシリテーターの方々、SGの方々はとても優しく、気遣いできる人が多く、多くの場面で助けられることが多かったです。日本とはいい意味で人柄が大変異なる人々と交流したくさん思い出を作れたのは貴重な財産になりました。彼らのフレンドリーな性格のおかげで3週間という短い間の中でも非常に仲が深まり別れの際には共に涙を流し別れを惜しましました。

今回のフィリピン留学は、私の今までの人生の中で最も濃い3週間だったといっても過言ではありません。帰国後は、自分自身の価値観や考えた方にも変化が見られ、日本の安全性や日本食の親しみ深さに感動する一方、フィリピンの方々のように積極的に人と関わり、明るく接する姿勢は見習いたいと思いました。また、3週間で英語力は上がったと実感する一方で単語力の欠如、早いスピードのリスニング力不足、正しい発音の仕方は学んだが会話で使えるほど練習できていないなど自分の課題も浮き彫りになったのでそこも重点的に練習して次なるステップアップを目指したいと強く思いました。様々な形でこのプログラムを支えてくださった方たちには感謝を伝えたいです。ありがとうございました。そしてこれを読んで参加しようか迷ってる人はぜひ参加してほしいと思います。実りある留学になることは私が保証します。ぜひ挑戦してみてください!!!



このプログラムで私は発音や語彙などの英語力を向上させただけでなく、他の学部学科の友人やフィリピンの友人ができ、多くのことを一緒に経験しました。文字通りに一緒に思い出になると確信しています。プログラム参加前からも多くの苦難がありましたが、それを乗り越え、このプログラムに参加できて本当に良かったと思います。

このプログラムに参加した動機はなんといっても英語力の向上でした。英語は国際共通語であり、英語が話せたら世界中の色々な人と話せると思い、応募を決意しました。自分の専門の高度な分野は英語でしか学べないと知っていたので、英語に慣れるという目的もありました。

このプログラムの存在を知ったのは一回生の前期でした。上に挙げた理由から即座に参加を決め、プログラムの情報が回ってくるのを受け身で待っていました。しかし、ここで誤算がありました。大学では情報を主体的に取得することが求められます。私が知らないところで着々とプログラムの情報開示が進んでいました。プログラム参加希望者は後期が始まって一週目くらいまでにパスポートの取得が求められます。私は夏休み終盤時点でそのような情報を全く知らず、パスポートも持っていませんでした。あるとき普段は開かないBEEF+Ventureを訪れると、このプログラムの参加条件が公開されているではありませんか！すぐにパスポートを取得しました。あと一日遅れていたら私はこのプログラムに参加できなかったでしょう。こうして未来の最優秀学生は危機一髪プログラムへの参加を確定させました。

実際にフィリピンに渡航するのは2月下旬ごろですが、それまでに複数回事前学修会が実施されます。そこで一緒にフィリピンへ行く学生たちと親睦を深めたり、フィリピンについて学んだりするのですが、そこでも問題がありました。一緒に行く学生たちと全く仲が深まらなかったのです。それもそのはず、事前学修会は所詮4回しか開かれせん。ほとんどの学生は自分とは異なる学部学科から来ているので、普段の生活では顔を合わせることもありません。フィリピン渡航3日前の事前学修会が終わったときですら、全員の名前どころか顔も覚えていませんでした。同部屋の子と話したことすらありませんでした。この状態で3週間一緒に過ごすのかと半ば絶望していました。

では私がフィリピン研修を楽しめなかったかということそうではありません。むしろ、この体験記の冒頭でもお伝えした通り、一生の思い出になりました。実際にプログラムが始まると絶望など一瞬で吹き飛びました。同部屋の子とはすぐに仲良くなりました。さすがに30人全員と仲良くなるには1週間ほどかかりましたが、みんなの印象はゆっくり、しかし確実に変わっていききました。このプログラムではお互いをニックネームで呼び合うのですが、これはとても良いルールだと思います。多くの学生は自分のニックネームを名字でなく名前にするのですが、多くの研究が示している通り、名前で呼び合うと心の距離が縮まります。そのおかげか私たちもすぐに仲良くなりました。さらにフィリピンの人たちは日本人よりも明るく、距離も近いです。そのような人たちに囲まれて生活をしていると、引っ張られて自分たちも距離近く接することができるので、すぐに親密になれます。それはある意味で、他の英語圏の国ではなくフィリピンに留学することのメリットかもしれません。

最初は不安を感じていたフィリピンでのフル英語の授業についても、いい意味で予想を裏切り、全然負担になりませんでした。もちろん、初回の授業では英語を全く聞き取れないし、大勢の前で発表させられるし本当に驚きました。フィリピンの授業は、先生が前で講義するのを学生が聞いている日本の授業形態とは違います。分かった人から自分で手を挙げて積極的に参加することが求められます。なんなら、先生と目が合ったら強制的に答えさせられます。ただ私は自分が授業を形作っているように感じられて積極的に手を挙げたり目を合わせたりしていました。授業の半分くらいは先生と目が合っていました(笑) ときには、質問内容が聞き取れていない時でも答えていました。もちろん間違っており、的を射ていない発言もすることがあります。それでも答えたときには「そういう考えもあるね」や「面白い発想だね」のように、必ず肯定的な返事を返していただけました。このプログラムでは、一コマ3時間の授業が午前と午後一コマずつあります。いくら休憩があるといえども、3時間の授業は流石にきつだろうと思っていましたが、自分が積極的に参加し、クラスメイトの発言なども興味深く聞いていると3時間はあっという間です。また、1授業につき1回は必ずグループワークがあります。グループワークでは劇や模擬面接、プレゼンなどをグループでの打ち合わせのち授業内に行います。この打ち合わせが本当に楽しかったです！それぞれが意見を出し合って一つの作品をつくる。まさにこれからの時代に求められるスキルでしょう。

このプログラムの醍醐味といえば、UPLBの学生との交流だと思います。授業後に2時間程度キャンパスの周辺と一緒に散策するGI、夜にUPLBの学生に英語について質問できるNS、他にも多くの学生と触れ合う機会があります。現地の学生は日本に興味がある人が多く、日本語が話せる学生も多

くいます。日本から来ましたと言えば、それだけで温かく向かい入れていただけました。私は現地の学生と皆既月食を見ました。インスタは連絡ツールとして必需品です！間違っても私みたいに渡航前にインスタをアンインストールしたりしないでください！

他にも、現地の学生との Karaoke 大会、Market Tour など滞在中、多くの時間を彼らと共有します。彼らは同行しませんが、Manila Trip や Villa Escudero は一緒にフィリピンに行く仲間たちとのいい思い出になるでしょう。私はこの2つのイベントを通して現地の先生方から「日本による過酷なフィリピン統治を経てフィリピンが日本に友好的なのはなぜなのか」や「フィリピン人として日本をどう思うのか」などセンシティブに思われる質問もたくさんしました。(喜んで答えてくれました！)これはインターネットで調べても、ChatGPT に聞いても出てきません。実際に彼らに質問してみてください！

こう振り返ってみても、プログラムを通して得たものがとても多く、極めて充実した時間を送ることができたと思います。参加をためらっている人がいたら、ぜひ参加してください！フィリピンについて何も知らない人がいたら、ぜひ参加してください！もちろんフィリピンについて詳しい人もぜひ行ってください！そういう人こそ参加すべきです。参加しても失うものは何もありません。参加するのに必要なお金と時間に合うリターンが得られると確約します！ぜひチャレンジしてみてくださいね！



Closing Ceremony にて

Batch20(2025年度)

「一歩踏み出して得た、人生最高の3週間」

惑星学科1年 H.O.

私がこの留学に参加した理由は、もちろん英語力を伸ばしたいという気持ちもありましたが、それ以上に、海外に行くことで新しい価値観に触れたいと思ったからです。これまでの自分は、どうしても限られた環境の中で物事を考えがちで、自分の視野が少し狭くなっていると感じていました。だからこそ、日本とは異なる文化や背景を持つ人たちと交流することで、自分の考え方の幅を広げたいと思いました。

また、中高6年間で予定されていた海外研修がコロナの影響で全て中止になり、一度も海外に行けなかったことも、このプログラムに参加しようと思った大きなきっかけです。

申し込んだ当初は楽しみな気持ちもありましたが、留学の日が近づくにつれて不安の方が大きくなっていきました。事前学修会では周りとの温度差を感じてしまったり、これまで中高と男子校だったこともあって女子が多い環境にうまくなじめなかったりして、「本当に行って大丈夫かな」と後悔することもありました。

実際、あとから友達に言われたのですが、事前学修会や空港、最初の1週間はあまり周りと話せていなかったのも、「背が高く全然話さない人」という印象で、少し怖かったそうです。

フィリピンに着いてから最初の3日間ほどは、周りともほとんど話せず、自分の英語にも自信が持たなくて、「これから3週間もここで過ごすのか」と思い、正直すぐにでも帰りたいと感じていました。しかし、少しずつ周りや打ち解けていき、フィリピンの学生と交流する機会が増えていく中で、その気持ちは自然と消えていきました。気づけば毎日が楽しくて、最後には「帰りたくない」と思えるほどになっていました。

ここからは、このプログラムの魅力を3つ紹介したいと思います。

1つ目は、最高の友達に出会えることです。

このプログラムに参加している人は、みんな「留学したい」という同じ気持ちを持って集まっているので、価値観や志向が似ていて、とても打ち解けやすいです。その分、短い期間でも本当に仲良くなることができます。

授業の後には、日本ではなかなか見られないような満天の星空の下で、涼しい風にあたりながら恋バナや何気ない話をしたり、部屋で映画を見たりと、何気ない時間もすごく印象に残っています。また、授業では毎回違うメンバーでグループワークを行うので、自然と全員と関わることができるのも魅力の一つです。

さらに、平日の授業後には UPLB の学生と交流する「GI (Guided Instruction)」の時間があり、現地の学生と直接話すことができます。フィリピンの学生は本当に明るくてフレンドリーで、どんなことでも前向きに褒めてくれるので、すぐに打ち解けることができます。最後のGIでは、お互いに涙を流しなかなかに別れることができず、それだけ濃い時間を過ごせたと実感しました。

実際にプログラムが終わった後も、一緒に参加した仲間とご飯に行ったり、フィリピンの学生と SNS でやり取りを続けたりと、関係は今でも続いています。

特に理学部の人にとっては、普段の大学生活ではなかなか関わる機会のない農学部の人や海外の学生とつながれる貴重な機会だと思うので、ぜひ参加してほしいです。

2つ目は、新しい価値観に触れられることです。

この3週間の留学では、空港から大学までの道中で見かけたスラム街や物乞いをする子供たち、決して万全とは言えないトイレやシャワー、整備が行き届いていない道路など、日本にいれば到底経験することのできない環境の中で生活しました。

そのような環境に身を置いたことで、いかに自分が恵まれた環境で生活しているのかを実感すると同時に、これまでどこか自分に甘えて過ごしてきた部分にも気づかされました。

また、GI (Guided Instruction) や日常の時間を通して UPLB の学生と交流する中で、彼らの学びに対する姿勢にも大きな刺激を受けました。

彼らは皆、自分の専門分野に強い誇りを持っており、講義中も積極的に手を挙げて質問をするのが当たり前だと話していました。その主体的に学ぶ姿勢や貪欲さに触れ、自分自身の学習に対する向き合い方を見直すきっかけとなりました。

このように、日本とは異なる環境や価値観に直接触れることで、自分の中の「当たり前」が大きく揺さぶられ、物事をより広い視点で捉えられるようになったと感じています。

3つ目は失敗を恐れず挑戦できる環境です。

私はこの留学を通して、以前より人前で自信を持って話せるようになりました。留学前の私は、人前に立つと緊張で表情が強ばり、自分の考えをうまく相手に伝えることができませんでした。

しかし、この留学では毎日のように全員の前で発表したり、自分の意見を述べたりする機会があり、そのような環境の中で挑戦を重ねるうちに、少しずつ自信を持って話せるようになっていきました。

特に大きな転機となったのは、2週目に「間違えてもいいから、とにかく発言しよう」と自分の中で決めたことです。それ以降は積極的に手を挙げるようになり、授業やGIでも自分から発言する機会が増えていきました。その結果、英語だけでなく、「伝えようとする力」そのものが大きく伸びたと感じています。

また、発音の授業では、英語と日本語は全く異なる言語であり、口の動かし方も大きく違うことを学びました。そこで私は、失敗を恐れず恥ずかしさを捨てて、講師の口の動きを大げさなくらい意識して真似するようにしまし

た。その結果、発音を褒めていただく機会も増え、楽しみながら学ぶことができました。

自分がうまく発音できない単語も、納得できるまで何度も繰り返し練習し、先生や現地の学生に「言えているよ」と認めてもらえたときの喜びは、今でも強く印象に残っています。

日本では周りの目を気にしてしまい、思い切って発音することにためらいを感じることもありますが、フィリピンではむしろその積極的な姿勢が評価される環境でした。この違いも、自分にとって大きな気づきとなりました。

そして、出発前日のクロージングセレモニーでのプレゼンテーションでは、留学前の自分では想像もできなかったようなアドリブで場を盛り上げることができ、自分自身の成長を強く実感しました。

この経験を通して、「完璧でなくてもまずは挑戦すること」の大切さを学び、自信を持って自分の考えを発信できるようになったと感じています。

最後に、私から新1・2回生や、理学部への進学を考えている高校生に伝えたいことがあります。

それは、「とにかく後悔はしないから、ぜひ参加してほしい」ということです。

このプログラムには、今回紹介しきれなかった魅力がまだまだたくさんあります。それほどまでに、濃くて価値のある3週間でした。

実際、私自身も申し込んだ当初は不安の方が大きく、「本当に行っても大丈夫かな」と後悔したこともありましたが、すべてを終えた今、この3週間は決して誇張ではなく、これまでの人生の中で一番楽しく、そして最高の経験だったと胸を張って言えます。

もし少しでも迷っているなら、ぜひ一歩踏み出してみてください。その一歩が、きっとこれからの自分を大きく変えるきっかけになるはずですよ。



最後のGIで涙を流しながら別れを惜しむ様子



GIの様子

Batch20(2025年度) 「世界の中で、どう生きるか」 感星学科1年 R.T.

三週間のフィリピン留学は、私にとって単なる語学研修ではなく、「自分がどのように世界と関わっていくのか」を問い直す時間であった。日本のように整備されたインフラや明確なルールに守られた環境を離れ、それらが必ずしも機能しない場所で、人と意思疎通を図りながら物事を前に進める——その経験を自らの中に刻みたいと考え、この留学に臨んだ。その決意は、出発前にはまだ輪郭の曖昧なものでしかなかったが、今振り返れば、あの時すでに私は「変わることをどこかで望んでいたのだと思う。慣れ親しんだ日常から一歩外へ出ることでしか得られない何かがあると、言葉にならない確信のようなものが、静かに胸の奥で揺れていた。関西空港から飛び立ち、六時間以上の移動を経て到着したフィリピン。空港を出た瞬間、私の目に映ったのは、日本とはあまりにも異なる光景だった。信号や歩道が十分に整備されていない道路を、車や人が互いに流れを読み合いながら行き交っている。その様子は一見すると混沌としているが、不思議と秩序が崩れているわけではない。むしろそこには、規則に頼らずとも成り立つ「人の感覚による社会」が存在していた。私はその空気に戸惑いながらも、次第に惹かれていった。

耳に飛び込んでくるクラクションの音、湿り気を帯びた空気、色鮮やかなシーブニーが行き交う風景——そのすべてが、これまでの自分の世界の狭さを突きつけるようであり、同時に、新しい世界への扉が開かれていく感覚を伴っていた。大学に到着すると、「オブレーション像」が静かに佇んでいた。国家への自己犠牲と献身を象徴するその姿は、異国の地に立つ私に、この国の価値観や歴史の重みを無言のうちに語りかけているようだった。その前に立ったとき、自分がこれから触れる世界の深さを、わずかに予感した。夕暮れ時、その像が赤く染まる空を背に浮かび上がる様子は、どこか神聖ですらあり、私はしばらくその場から動くことができなかった。言葉を持たないはずの像が、確かに何かを語っている——そんな感覚に包まれていた。その後の二週間、私は英語の授業とGI (Guided Instruction) に取り組んだ。授業では、現地の講師から“生きた英語”を学んだ。単に正しい文法や表現を覚えるのではなく、「どうすれば相手に伝わるのか」「どのように感情を乗せるのか」といった、言語の本質に触れる学びであった。言葉とは単なる道具ではなく、人と人をつなぐ媒体であることを、実感として理解していった。

時には自分の拙い英語に歯がゆさを感じ、言いたいことが言葉にならないもどかしさに押し潰されそうになることもあった。それでも、相手は最後まで耳を傾け、理解しようとしてくれる。その姿勢に何度も救われながら、私は少しずつ「伝える」という行為の本質を学んでいった。GIでは現地の大学生と交流し、学業や社会問題、さらには日常生活や恋愛といった個人的な話題まで、幅広く語り合った。そこには、日本で当たり前だと思っていた価値観が決して普遍ではないという事実があった。むしろ違いがあるからこそ、互いの考えに耳を傾ける意味が生まれるのだと気づかされた。

議論が白熱し、言葉に詰まりながらも必死に自分の意見を伝えようとする時間は、決して楽なものではなかった。しかしその一つ一つが、自分の思考を深め、世界の見え方を変えていった。特に強く心に残ったのは、人々の在り方である。決して恵まれた環境とは言えない中で、彼らは驚くほど明るく、他者に対して惜しみなく優しさを向けていた。その笑顔には作為がなく、自然体であるがゆえの力強さがあった。日本では、豊かさや効率性の裏側で、人と人との距離がどこか形式的になってしまっているのではないかと

な問いが、自分の中に芽生えた。何気ない会話の中で交わされる冗談や笑い声、初対面にもかかわらず差し伸べられる手。その一つ一つが、人と人が関わることの原点を思い出させてくれた。

衛生環境などの面では決して快適とは言えない場面も多かった。しかし、その中で人々は工夫を重ね、日々の生活を築いていた。限られたものの中で最大限に生きる知恵は、日本では見落としがちな「生きる力」そのもののように思えた。不便さは時に苛立ちを生むが、その一方で、人間の本来持つ柔軟さや適応力を呼び覚ます。整いすぎた環境では気づけなかった多くのことに、私はこの場所で出会った。留学中には三つの大きな出来事があった。

まず、UPLBのキャンパスツアーでは、生命科学研究所や植物園、カラバオ牧場を訪れた。最先端の研究に触れたとき、そこには人類の未来を切り拓こうとする確かな意志が存在していた。同時に、自分はその未来にどのように関わっていくのかという問いが、静かに胸に残った。

広大な自然と研究施設が共存するその環境は、学びとは教室の中だけに留まるものではないということを教えてくれた。

次に、ピラ・エクステロ・リゾートでの体験である。いかに乗り、プールで遊び、仲間と笑い合う時間の中で、私は日常を忘れ、ただ青春の只中に身を置いていた。そこには理屈では語れない、純粋な「生」の輝きがあった。水しぶきの冷たさ、太陽の強い光、絶え間なく続く笑い声——そのすべてが、かけがえのない一瞬として心に刻まれている。そしてマニラへの旅では、都市の発展とその影にある貧富の差を目の当たりにした。同じ街の中で、まったく異なる現実が並存している。その光景は、単なる知識としてではなく、自分の感覚に直接刻まれる経験となった。

煌びやかなショッピングモールのすぐ隣に広がる別の現実。そのコントラストはあまりにも鮮烈で、私は言葉を失った。三週間という時間の中で、現地の学生たちとの距離は驚くほど縮まった。言葉や文化の違いを越え、同じ時間を共有することで生まれる絆の強さを、私は初めて実感した。最終日の夜、私たちは涙を流しながら抱き合い、それぞれの大切なものを交換し、再会を誓った。その瞬間、別れの寂しさと同時に、人と出会うことの尊さが胸に溢れていた。

あの夜の空気の温度や、涙で滲んだ視界の中に映る仲間の姿は、今でも鮮明に思い出すことができる。また、日本から共に来た仲間とも、かけがえのない関係を築くことができた。異国の地という非日常の中で互いを支え合い、夜を明かして語り合った時間は、単なる友情を超えた深い結びつきを生んだ。何気ない一言や沈黙さえも共有できる関係は、簡単に得られるものではない。その尊さを、私はこの旅で知った。この留学で得た人とのつながりは、三週間という時間の枠を超え、これからの人生においても続いていく確かなものとなった。そして、それ以上に大きかったのは、自分自身の内面的な変化である。

これまで私は、何かを「所有すること」や「他者から認められること」に価値を見出していた。しかし、この三週間を通してその価値観は大きく揺らいだ。見知らぬ環境に身を置き、新しいことに挑戦し、人と出会い、心を動かされる——そうした「経験」こそが、自分を形作り、人生を豊かにするのだと実感した。

形として残るものではなく、記憶や感情として積み重なっていくものこそが、本当の意味で自分の一部になっていくのだと、今ははっきりと言える。

この留学は、過去の出来事として終わるものではない。ここで得た視点や感覚は、これから先の選択や行動の中に息づいていくはずである。三週間という短い時間の中で得たものは、あまりにも大きく、そして確かなものであった。

そして最後に、この文章を読んでいる後輩へ伝えたい。

もし少しでも迷っているのなら、ぜひこのUPLBでの研修に参加してほしい。異なる文化や価値観の中に身を置くことは、決して楽なことではない。戸惑い、不安になり、自分の無力さを感じる瞬間もあるだろう。しかし、その一つ一つの経験こそが、自分を大きく成長させる糧になる。

教科書の中では決して得ることのできない学びが、ここには確かにある。そして何より、人と出会い、心を通わせることの喜びを、全身で感じることができる。

世界は、自分が思っているよりも広く、そして温かい。

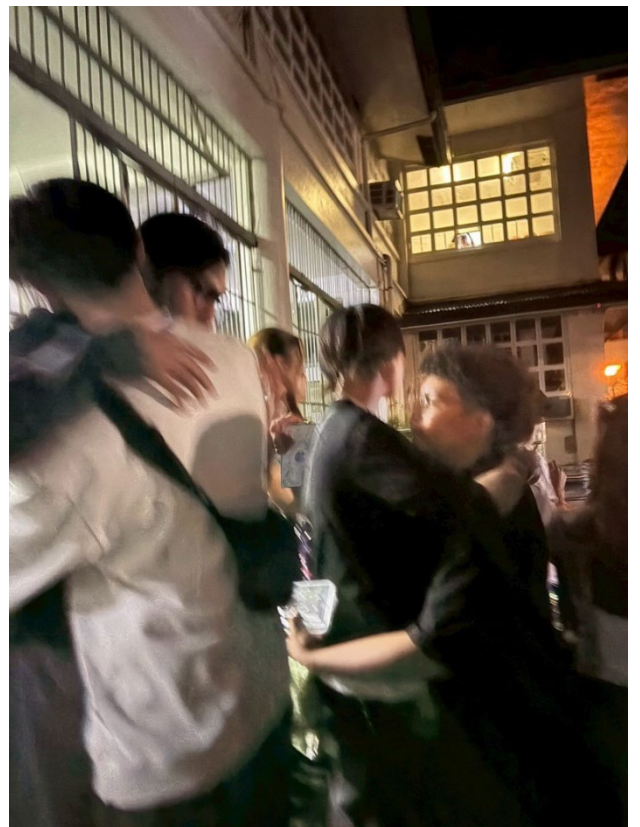
その一步を踏み出すかどうかで、見える景色は大きく変わる。

だからこそ、恐れずに飛び込んでほしい。

きっとその先には、これまでの自分では想像もできなかった新しい自分が待っているはずだからだ。



「オペレーション像」と私



現地学生との最後の夜 互いに抱き合い涙を流しながら再開を誓う様子